

38  
光村 小国 319

垣内松三著

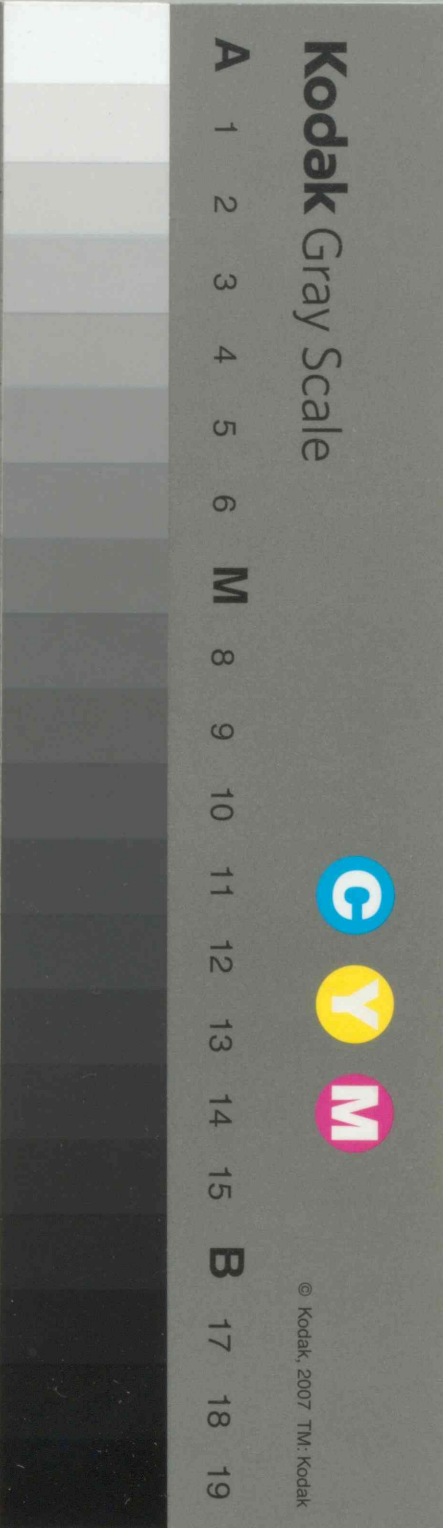
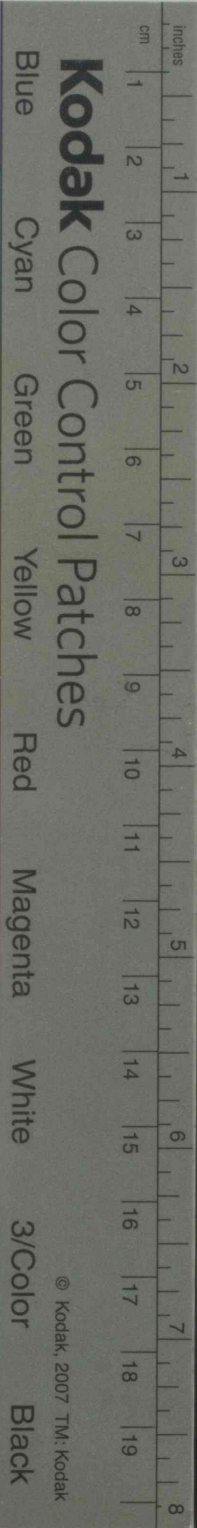
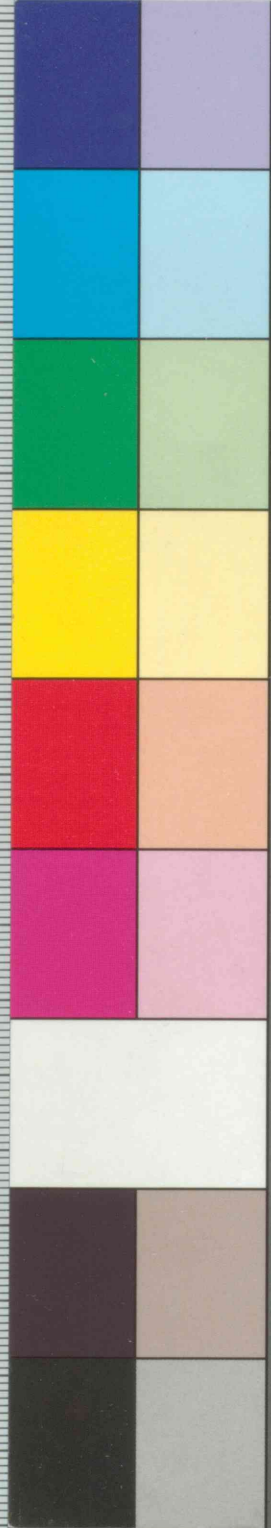
教育部  
資料室

# みどりの手旗

新国語 三年 下

文部省検定済教科書

教科書文庫  
6  
810  
34-1950  
0130449804



60257  
教科書文庫  
6  
810  
34-1950  
01304  
49804



寄 贈

教科書文庫  
6  
810  
34-1950  
0130449804

昭和二十五年  
文 部 省 検 定 済  
小 学 校 国 語 科 用

みどりの手旗

広島大学図書

0130449804



新国語 三年 下

指導者のために

(一) この本は、交通・運輸と人間の生活に取材し、その相互運関における協力の精神に対する理解を強調しながら、身心の発達に即して國語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集した。特に言語の態度を中心として、言語諸機能の学習が興味のうちにも有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は次の三つの題目に分かれている。

一 みどりの手旗

陸上の交通に取材して、生活文・詩・物語を提出し、社会運帯の精神を深めながら言語生活の分野を広げることとする。

二 えい画会

海上の交通と映画を結んで、映画に対する理解と親し

みを深め、協力の精神を強調しながら言語諸機能を連結して言語経験を広げることとする。

三 力を合わせて

國語学習・学級日記を中心として各自の学習に対する反省を深めながら、言語態度を確立することとする。

(三) この本に提出した新出語は一四二語で、毎ページの新語率は二・二語である。学習の仕方・新語表・新字表を掲げて学習の便を図ると共に文章は敬体口語を主としながら、次第に常体口語にも慣れさせるように留意した。

(四) この本のさしえは学習上重要な位置を占めるので特別な考慮が拂われている。

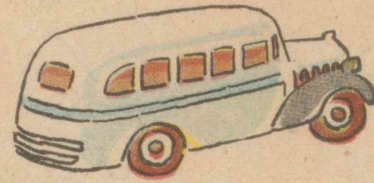
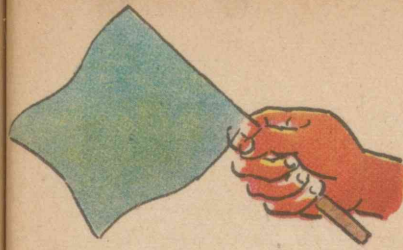
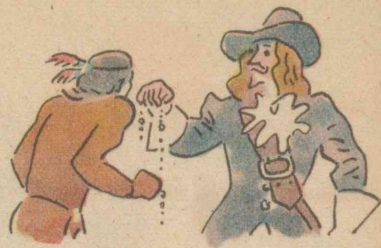
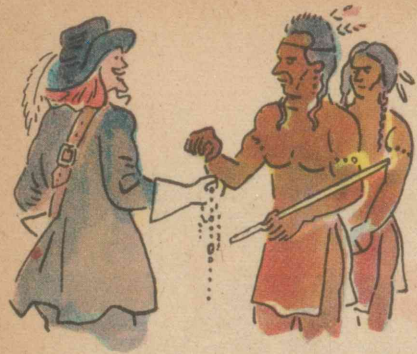
(五) この本の使用期間はだいたい一月から三月までを目標とし、大題目を平均一か月あてとしたが、それを固執する必要はない。地方の実情に即し、児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

(右は本書編集の概要である。詳細は新國語指導書を参照されたい。)

広島大学図書

0130449804





学習の仕方  
新しいことば  
かん字表

65

- 三
- 力をあわせて………
- (一) おもしろかった文
- (二) 学級日記

44

二

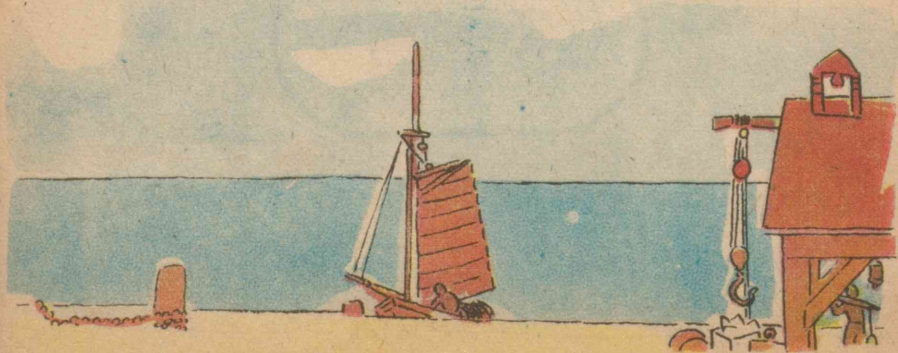
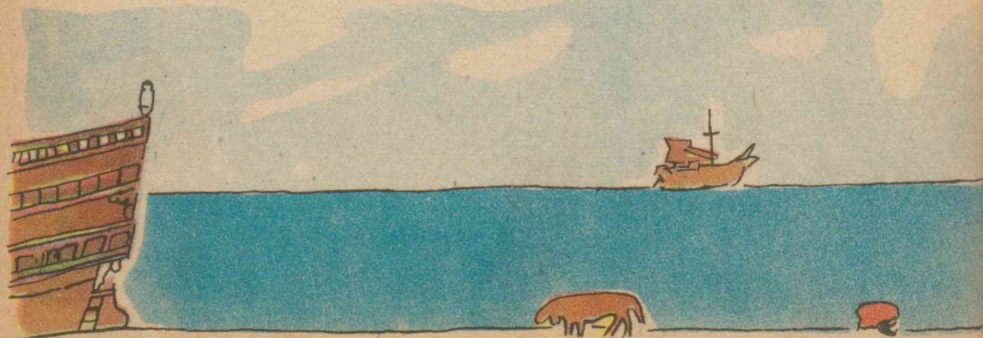
- えい画会………
- (一) たまごが立つ
- (二) コロンブス
- (三) 森のなかま

23

一

- もくろく
- みどりの手旗………
- (一) 山のバス
- (二) みどりの手旗
- (三) 手をふる少女

4





一 みどりの 手旗

(一) 山の バス

お正月の 朝でした。

ひさしさんは、にいさんに つれ  
られて スキーに いきました。

駅から、スキー場に 近い 温せ  
ん町まで、バスが 通って います。

ひさしさんたちは、八時の バス  
に 乗りこみました。スキーを持っ

た 学生さんたちが、たくさん 乗って いました。

「やあ、おめでどう。」

「おめでどう。さあ、ここに かけなさい。」

にいさんの 友だちも いて、席を あけて くれました。  
まもなく、バスが 動きだしました。

「ぼく、早く スキーが じょうずに なりたいなあ。」

と、ひさしさんが いうと、

「うまく すべれるように 教えて あげるよ。」

と、にいさんが いました。

バスは、町はずれの ていりゆう所に とまりました。お  
客が 数人 乗りました。



と 声を かけて、大きな カバンを かけた ゆう便を  
配達する 人が、乗りこんで きたからです。  
「やあ、おはよう。ーいや、おめでどう。」  
運てん手さんも そう いったので、お客さんが わらい  
ました。

「ごくろうさんですね。」  
車しようさんが いいますと、  
「いや、あなたたちこそ ごく  
ろうさん。ーきょうは、ねん  
がじょうで こんなに たく  
さんなんだよ。」

「この 荷物を お願いします。」  
と 行って、さし出した 人が いました。わかい 女の  
車しようさんが、  
「はい、いつもの おやどですね。」  
と 行って あずかりました。  
交通が 不便なので、バスが いろいろの 用事を たの  
まれて いるのだと 思いました。  
運てん手さんは、みんなが 乗っても 発車しないで、し  
ばらく 待って いました。が、その わけは すぐ わか  
りました。  
「やあ、おはよう。いや、きょうは おめでどうだったな。」



その人は、カバンを たたいて みせま  
した。

バスが 発車しました。

ゆくてには、雪に おおわれた 山々が  
せまって きました。

「どの 山ですか、にいさん。」

「あの 山の うらてに あたる 所だよ。」  
にいさんと 話を して いる うちに、

バスは、山道に さしかかりました。

エンジンの 音を 強くして、いきおいよく あがって

いきました。

道ばたに、雪に おおわれた かやぶきの 家が ありま  
した。日の まるの 旗が 立てて ありました。

バスの 音を 聞きつけたのでしよ、小さな 男の子  
が 出て きました。運てん手さんは バスの 速さを ゆ  
るめました。

「ねえさん、早く 帰ってよ。待って いるからね。」  
と、走りながら よびかけました。

きつと 車しよさんの 弟でしよ。

「おとしだまを 持って きて あげますよ。」

車しよさんが、まどから にこにこして こたえました。  
ひさしさんも、男の子に 手を ふりました。

(二) みどりの手旗

あごひもを、しっかりとかけた  
わかい 駅員が、  
後の 貨車の上で、  
みどりの 手旗を ふった。  
長い 貨物列車が、  
あとがえりを はじめた。  
旗に みちびかれながら、  
むこうの レールに うつつて いった。



遠くで、みどりの 手旗を ふって いる。  
機関車が 貨車を つき放した。  
ひとりで 走りだす 貨車、  
ひらりと 飛び乗る 人の かけ、  
夕日を 受けて かげ絵の ようだ。

ガシヤンと 音が ひびいて、  
貨車と 貨車とが 手を つないだ。



(三) 手をふる少女

—

アメリカを、東から西に横ぎつている、長い鉄道が  
あります。その鉄道は、目もさえぎるものな  
い。大平野を、何時間も通る時があります。  
そのあたりは、どこを見ても、麦や、とうもろこしや、  
じゃがいもの畑で、家らしいものを見かけません。そ  
んなさびしい畑の中に、ぽつんと農家が一けん、  
鉄道の近くにたつていました。

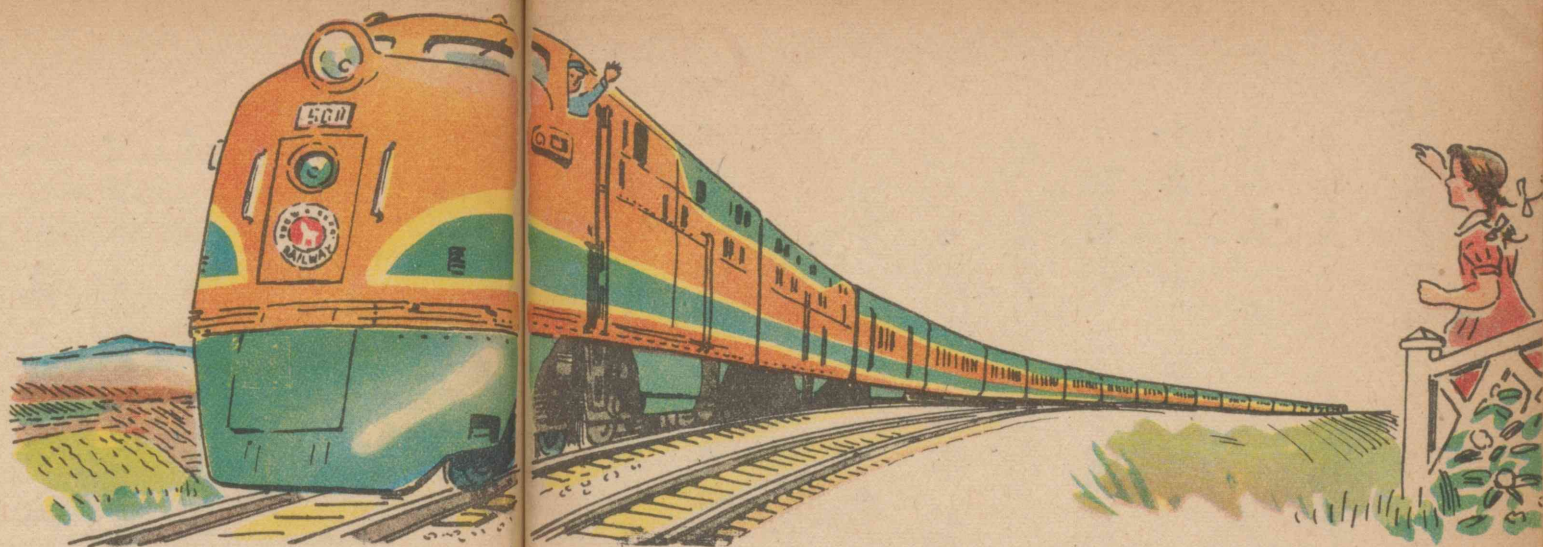
ジーゼル機関車にひかれた流線型のとくべつ急行列  
車や、オレンジ色の貨物の急行などが、毎日、その家  
のそばを通りすぎました。

いろいろな汽車が通るたびに、きつと、七つかハ  
つぐらいの女の子が、さくの所でしきりに手を  
ふっていました。

初めてのうちは、それに氣のついた機関士だけが、  
手をふりながらこたえていきました。が、一年ほど  
たつと、そこを通るどの汽車の機関士も、みんな  
知るようになりました。

その家が近づいてくると、機関士の方から顔を





出して、今か今かと 待つようにさえ  
なりました。

いつの間にか、機関士たちにとっ  
て、「手をふる少女」は、この大平  
野の中の、楽しい 信号所と なっ  
て いました。

二

ところが、機関士たちの 楽しい  
信号所に こしよすが おきました。  
手を ふって やろうと、心待ちに

して きた 機関士たちの 目に、少  
女の すがたが うつらなく なった  
のです。

下りの 列車を 運転して いった  
者は、上りの 時には とくに 気を  
つけて 見るのですが、やっぱり、女  
を見せませんでした。

の子は すがたを  
どうしたのだろう。  
だろうか。——そんな  
うかんで ききました。

女の 子の、見えなく なった わけを 知りたい もの

だ。なんとか ならない ものだらうか。——と、思う 心も  
も みな 同じでした。

その 事が、機関士たちの 声と なって、鉄道に 働いて  
いる 人たちの 組合に つたえられました。

組合の 人たちは、「手を ふる 少女」の ようすを、しらべて  
みて みようと いう ことに なりましたが、だれも なまえさえ  
知りません。しかし、その 家の 場所は わかって いるので、  
地図の 上で しらべました。

一つうの 手紙が あの 一けん家から 一ばん 近い、  
それでも、二十マイルも はなれて いる、ミルトンと いう  
小さな 駅の 駅長に とどけられました。

組合から 手紙を 受け取った 駅長は、さっそく 自動  
車を 走らせました。

三

たずねあてた 農家には、病気で ねて いる 女の子  
と、その 父と 母が いました。貧しい 暮らしの よう  
でしたが、いかにも 気の よさそうな 人たちでした。

駅長は、どうして 組合が こんな 事を たずねて よ  
こしたのだらうかと 聞いて みました。が、両親とも しり  
ませんでした。

女の子は、エレンと いう なまえで、七つでした。

町から 医者に きて もらいましたが、たいへん むずかしい 病気で、おそらく 手あての しょうがない だろ うと いわれた ことも わかりました。

駅長は 自動車を ひきかえして、町で ただ ひとりの 医者 の 家 に いきました。

医者 の 話 では、もし、一流の 大学病院 に ても いけば、あるいは、なおす 方法 が あるかも しれないが、この 町では どうにも ならないと いう ことで ありました。

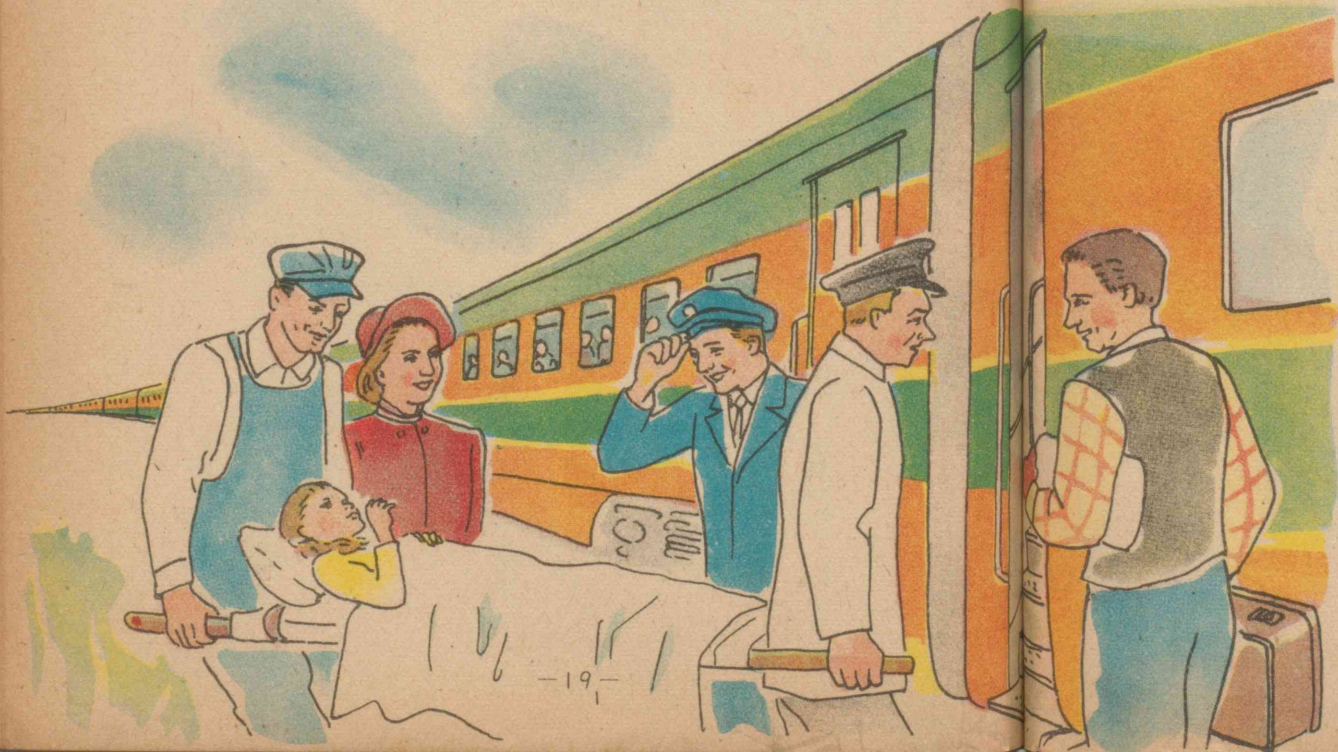
駅長は、電話で この こと を 組合 に しらせました。

組合では 委員会が 開かれ ました。

そして、  
「われわれの 手で、あの 子 を 救おうでは ないか。」

と、いう こと に なりました。  
組合の 人たちの する し ことは、列車を 運転するよう に、すばやく すすめられて きました。

会社の ゆるしを 受ける、



きふ金を 集める、大学に お願いする、女の 子の 家に  
連らくする、―たちまち できて いきました。

四

機関士の 代表が、エレンの 家をおどすれました。花  
たばと 人形が エレンの 手に わたされました。

いよいよ、シカゴと いう 大きな 町の、大学病院に  
入院する 日が きまりました。

たんかに 乗せられた エレンが、さくの 所に 運び出  
されました。いっしょに ついて いく 母親が、たった

一まいの よそゆきの 服を 着て、そわそわして いまし  
た。

やがて、遠くから 列車の ひびきが つたわって きま  
した。いっつもなら、すばやい 速さで ぐんぐん 近づいて  
来るのですが、きょうは ゆるやかな ちようしに かわつ  
て 走って きました。

流線型の 機関車が、大きな すがたを あらわしました。  
年とつた しらがの 機関士が、エレンを 見つけて、大き  
く 手を ふりました。エレンも、たんかの 上で にこに  
こして 手を ふりました。

機関士は うしろを ふりかえって、ちようど エレンの  
所に、一等しん台車が ぴたりと 止まるように ブレーキ

を かけました。

大平野の まん中に 列車が 止まったので、乗客は ぶしぎそうに まどから 顔を出しました。そして、たんかに 乗せられた 少女が、鉄道の 人たちに いたわられて、列車に 運びこまれるのを 見ました。

機関士は、からだを のりだして、じつと その ようすを見て いました。エレンが 運びこまれると、車しよから 発車の あいすが きました。列車は 静かに 動き始めました。

あとに 残った 父親が、エレンのように 手を ふりながら、小さく なるまで 見送って いました。

## 二 えい画会

学校で えい画会が ありました。文 化えい画と、物語の えい画と、まん画の えい画でした。

(一) たまごが 立つ



音楽——。

中国の 人たちが、つくえの 上に 立った たまごを見て いる。

たまごから 字が 飛びだして きて 大きく うつる。

「たまごが立つ。」

それに、新聞が かぶさって いく。二月五日の 日づけ。  
「立春の 日には、たまごが立つ。」

と いう 見だして、中国の 電ぼうが のって いる。

音楽が やんで、説明の ことば——。

「中国の むかしの 本に、立春の 日には、たまごが 立  
つと いう 話が 書いて あります。立てて みると、  
たしかに 立ちました。中国は いうまでも なく、日本  
にも、アメリカにも、その 話が つたわって、立春の  
日に たまごを 立てる ことが はやりました。」  
スクリーンは、方々で たまごを 立てる 場面になる。

ピアノの 上に 立てて、おかあさんと 話を して いる  
少女。えんがわの 上に 立てて、おとうさんと 話を  
して いる 少年。事む所の つくえの 上で、立てようと  
して やつきと なって いる おとなたち。

屋根から つららが たれて いる けしき。寒さを 示  
した 温度表。——説明。

「立春は、まだ 寒さが きびしいので、たまごの 黄味が  
こおって それで おちつくのだ」と いう 人も あり  
ますが、それでは。」

と いう 声と ともに、実けん室——。

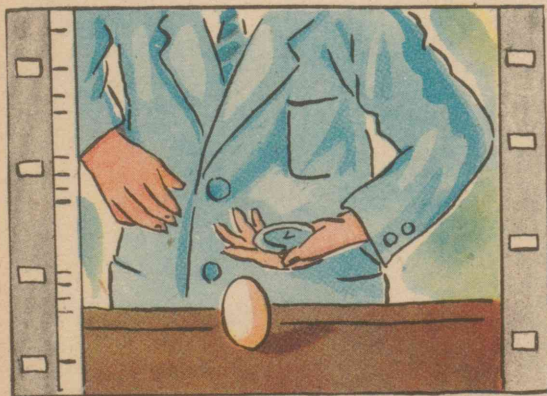
たまごが つくえの 上に 立てられて いる。それが



つまみあげられて、おゆの たぎって  
 いる なべの 中に 入れられる。  
 なべから 取りだされた たまごは、  
 ゆげを たてながら つくえの 上に  
 立つ。ゆでられて いる しるしに た  
 まごを わって 見せる。  
 「たまごが 立つのは、こおったからで」  
 も なければ、ゆでられたからでも ありません」  
 たくさんの たまごが はいって いる かご。その 中  
 の ひとつが とりあげられる。  
 たまごを 立てようと する。指を 放すまでの 時間

を ストップ・ウォッチで はかる。三秒——たまごは こ  
 ろげる。五秒——ころげる。八秒——ころげる。十秒、十五  
 秒、二十秒……はりが すすむ。——静かに 手を 放す。と、  
 たまごは そのまま 立って いる。

「つまり、全体の つり合いが とれれ  
 ば たまごは 立つ わけです。立春  
 に たまごが 立つと いう 話も  
 おもしろいが、この 実けんは いか  
 がですか」  
 たくさん 立って いる たまご。  
 音楽—。



(二) コロンブス

コロンブスの物語は、長い えい画でした。  
先生が、

「コロンブスの物語を、みじかく まとめて お話を  
して みましよう。」

と おっしゃいました。

みんなは、さつき 見た えい画を、静かに 思いだして  
みました。

みどりさんが 立って お話を しました。

「むかし、イタリヤに コロンブスと いう 人が いま  
した。広い 海の上を、西へ 西へと いけば、きっと、  
陸地に いきつく ことが できると 思いました。

しかし、その ころの 人たちは、そんな ことは でき  
ないといつて ききませんでした。

それでも コロンブスは、スペインの イサベラ女王の  
たすけを うけて、大きな 船に 乗って 出かけました。  
とちゆうで たいへんな あらしに あいました。いつま  
で たつても 陸地が 見えないので、不安に なった  
船員たちは、コロンブスを、ころして 帰ろうと した  
ことも ありました。





と 行って、その ことを お話しました。

「その ころ、人々は、世界は 一まいの いたのように  
平らな ものだと 思って いました。すすんだ 学者の  
間には、世界は まるい 大きな たまだと いう人も  
ありましたが、コロンブスも、その ような 学者と 同

じ 考えを もって いました。  
その ことが、この お話を  
するの に たいせつだと思  
います。」  
ひさしさんが、  
「コロンブスは 一回だけで

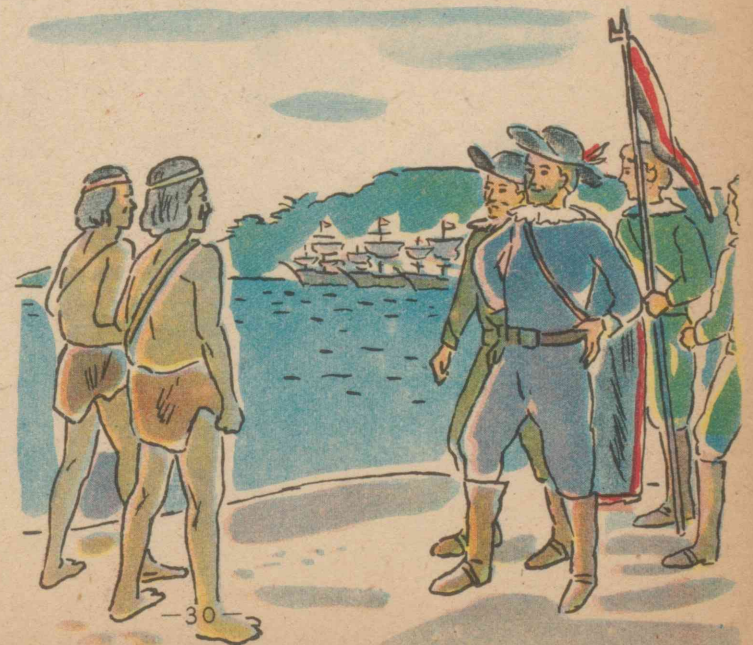
いろいろ 苦しい めに あ  
いながら、それでも、コロンブ  
スは みんなを なくさめたり、  
はげましたり して、どうどう  
陸地を みつけました。

それが、今の アメリカ大陸  
を 発見する きっかけとなつ  
たと いう 物語でした。」

みんなは はく手を しました。

まさおさんは、じつと 考えて いましたが、

「先生、今の お話に 足りない ところが あります。」



なく、なん回も くりかえして たんけんを しました。  
ぼくは、その ことも たいせつだと 思います。」

と いいました。すると、よしこさんが 立って、

「コロンプスの 成功を おいわいする 会の 席で、その 成功を ねたんで いた 人が、

『大洋を 西へ 西へと 行って、陸地を みつけた ところだ、それほどの てがらだらうか』。

と、悪口を いいました。コロンプスは、

『みなさん、これを 立てて ごらんなさい。』

と 行って、食たくの たまごを さしました。

みんなは、コロンプスが なぜ そんな ことを いい

だしたのかと、ふしぎに 思いながら やって みました。  
が、うまく 立ちません。コロンプスは、たまごの はし  
を こつんと わって、わけもなく 立てて いいました。  
『これも、人の した あとでは なんでもないでしょう。  
わたくしは、あの 場面も つけ加えたいと 思います』

と いいました。先生は、

「そうですね。四人の お話を 組みあわせると、いきいき  
とした、いい お話に なるよ 思います。」

と おっしゃいました。

そこで、さだおさんが、初めから 終りまで、きちん  
とまとめて お話を しました。

(三) 森の なかま

森の なかまに むかつて、とらが いいました。

「こんど、新しい えい画を 作るが、だれか さつえいぎ」

しに なつて くれないか。

「ぼくが やろう。」

と いったのは、さるでした。

「よしよし。きみは きようだ」

し、注意深いから よかろう。

とらは、さつえい機を さる

に わたしながら、

「これは 色の 着く さつえい」

い機だから、その つもりで

とつて くれたまえ。」

と、念を おしました。

「大じょうぶ。すばらしい 色を 写して みせよう。」

つぎに シナリオを 書く 人が います。

「さあ、だれが いいかな。」

なかまは 顔を 見あわせて いましたが、

「きつねさんが どうだろう。」

「そうだ。きつねさんは ちえが あるし、考えが いいし。」



と いいだしました。

「でもー」。

きつねは 心配そうな 顔を しましたが、

「そうだ、きみが いい。きみに まかせるよ。」

と、とらが いいました。

「かんとくは だれが よかろう。」

森の なかまは、口を そろえて いいました。

「それは 山ねこさんに かぎるよ。」

「山ねこさんは まねが うまいし、なんでも やれるんだから。」

山ねこは、まるい 目を くるんくるん まわしながら、

「では、その かわり、みんなも、じぶんの 役を くふうして やるんだぜ。」

と いいました。

「それは やるども。」

おしまいに、出演者を きめる ことになりました。

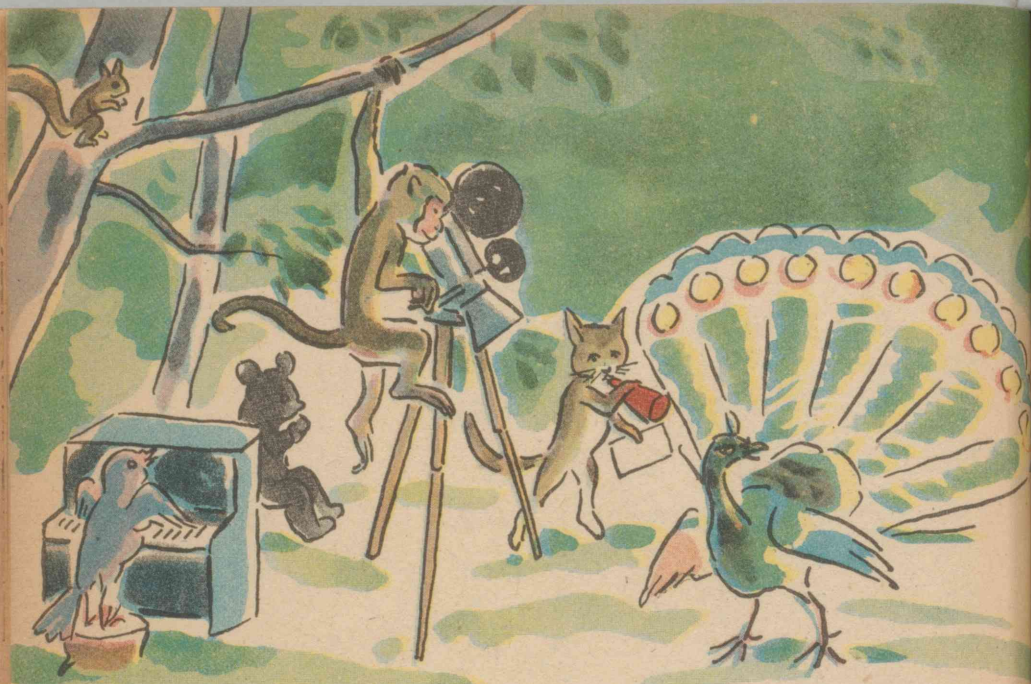
「みんなが 出て やってほ。」

と、たぬきが いいました。

くじゃくも、りすも、くまも、ふくろも、「それが いい。」と さんせいしました。

「ところで、作曲だが。」

とらが 思いだしたように いいました。



「わたしが やりましょう。」

と、出て きたのは 山ばどでした。

「コーラスの曲に しましうか。それとも ピアノの 曲に しましうか。」

「山ばどさんに まかせよう。」

その 夜、きつねは シナリオを 書きあげました。

つぎの 日から、それに あわせて、みんなで セットを 作りました。

一方では けいこに とりかかりました。

かんとくの 山ねこは、くるくる目だまを いっそう くるくるさせて いそがしそうです。せりふを いって みせ

たり、わらって みせたり、ないて みせたりー。

出演者が、めいめい くふうした 身ぶりを しても、山ねこは なかなか いいとは いいませんでした。みんなは きびしすぎる。ど いいましたが、山ねこは どうしても ゆるしません。

「いい えい画を 作るんだぞう。」  
山ねこに はげまされて、へとへとに なるまで けいこを か

さねました。

けいこが すむと さつえいです。

こんどは ぎしの さるが、顔を まっかに して かけ  
まわりました。

横から 写したり、下から のぞくように 写したり、木  
の えだに ぶらさがって、上から 写したり しました。

なんども、なんども、やりなおしを しました。その た  
びに、山ばとは、同じ 曲を なんども ひきました。

やつと、さつえいが 終わりました。

かんとくも、さつえいぎしも、出演者も、作曲者も、ぐつ  
たりと つかれて、ぐうぐう ねむって しまいました。

その 間に、さつえい所の 一室では、フィルムが げん  
ぞうされて いきました。

きれいに できあがりました。

そこで、とらは、森ぢゆうの なかまに、あんないの 手  
紙を だしました。

「あさつて、『みどりの谷』で、えい画会を 開きます。

ぼくたちの なかまが 作った えい画です。どうぞ、見  
に きて ください。みんな、さそつて おいでください。  
お金は いらしません。」

みどりの 谷間の、すぎの 木と すぎの 木の 間に、  
えい写まくが はられました。



みんな集まって、きました。

日がくれて、あたりが暗くなりました。

えい写機が、カタンカタン カタカタと 回りだしました。

えい写まくが、ぱつと 明るくなりました。

くじやくが、きれいな はねを ひろげて います。 はね

の中から、たくさんの 小人が 飛びだしました。よく

見ると、りすたちです。りすが 集まって、ばらの 花に

なりました。たぬきの 女王さまが、やって きました。ど

こからとも なく、美しい 音楽が 流れて きます。

えい画は、だんだん おもしろく なって いました。

見て いる 者は、さかんに 手を たたきました。

「こんな 楽しい ものが、森の なかまで できるんだな」

くまが 感心して いうと、木の えだで、

「ほんとうにね。みんなの ちえを 集め、力を あわせる」

と、こんなに りっぱな ものが できるのですね。」

と、ふくろが 大きな 目を ぱちくりさせて いました。

三 力をあわせて

(一) おもしろかった文

みんなは、国語の本、「みどりの手旗」のほかに、「たんぽぽ」と「まきば」を、つくえの上に出しました。

先生が、

「ただいまから、国語の反省会をします。どのように、話しあいをすすめていったらいいでしょうか。」  
と おっしゃいました。

「一ど、国語の本を、読んで みよう。」

と いう人も ありました。

けれども、それは時間がかかるし、もう、みんなは書いてある事がらがわかって いるのだから、よそう」と いう ことになりました。

「一課 一課について、何が書いて あったか、話して いったら どうですか。」

「それよりも、一課ごとに 心に 思いついた ことを 話そうよ。」

などと いう人も ありましたが、これも ひまが かかるので、どの 課かを ぬきだして、それについて、思いついた ことを 話しあおうと いう ことに きました。



た。

まず、「たんぽぽ」のもくろくを 開きました。

先生が、

「どれを ぬきだしますか。」

と いわれますと、ひさしさんは すぐ、

「子どもの 日」

と いいました。

「なぜですか。」

先生が おたずねに なると、

「ぼくたちの した ことと くらべて、いろいろ 発表が  
できるからです。」

と いいました。すると、

「わたしは『たんぽぽ』。

と、よしこさんが いいました。

さだおさんは『日記』が すき。」と いい、てつおさんは「ぞ  
うの たび」と いうて、なかなか きまりませんでした。

その 時、まさおさんが、

「先生、みんなが かってな ことを いったのでは、きま  
りませんから、一ばん おもしろかった 文を 選ぶ こ  
とに しては どうでしょう。」

と いいました。

先生は、それは いい 考えだと おっしゃったので、み



みどりさんが、

「わたしは、『海ひこ山ひこ』です。」

と、いうと、五六人の人が、「そうです。」と賛成しました。

「先生、『子犬物語』です。」

と、てつおさんが、いいますと、ほかの人が、「そうです。」

「そうです。」と、いいだしました。

それで、「まきば」では「子犬物語」が、一ばん おもしろかったと、いう ことになりました。

よしこさんは、

「わたしは、『ひとつぶの まめ』が おもしろいと思います。」  
と、いいました。それには 賛成した 人は ありませんで、

したが、よしこさんは、その わけを 話しました。

「あの まめの 子どもたちが、あれから どうなっていくか、いろいろ 考えた ことが あります。いくつもお話 が、できそうに 思われました。」

「いい ところに 気が つきました。あなたらしい 考えです。その お話を 作文に 書いて ござらん。」  
と、先生が おっしゃいました。

この 本、「みどりの 手旗」では、みんなが、いっしょに 手を ふる 少女」と、いいました。

その 時、さだおさんが、

「ぼくは、みなさんと ちよつと ちがうんですけどー。」

と、いいだしました。

『たまごが立つ』を おもしろいと 思いました。―それに、  
つぎの『コロンブス』と 読みあわせて みると、いっそう  
おもしろいと 思います。

「あ、わかりました。『たまごが立つ』と、コロンブスが た  
まごを 立てた 話との つながりが おもしろかったと  
いうのですね。」

先生が わかるように おっしゃると、さだおさんは、

「はい、そうです。」

と 答えました。

「いい ところに 気が つきました。きょうは、『おもしろ

かった文』を 選んで みたのですが、こんどは、見方を  
かえて 選んで みましよう。たとえば、『むずかしかった  
文』とか、『やさしかった文』とか いうように。」

ここまで 先生が いいかけますと、まさおさんが、  
「でも、先生、同じ『おもしろかった文』でも、人に よっ  
て ちがうのは どうしてでしょう。」

と ききました。

「さあ、どうしてだろうね。」

先生が、わらいながら みんなを 見られました。

「ひとり、ひとり、心が ちがうから。」

と いった 人が ありました。

「みんなの 考え方が きまぎまだからでしょう。」  
と いった人も ありました。

ひさしさんが、

「みんなの 顔が ちがって いるからさ。」

と いったので、どつと わらいました。

「いや、なかなか おもしろい ことになりましたね。こ  
の『おもしろい』という ことについて、考えて い  
けば、いろいろな 問題が わいて くと 思います。  
いつか、また、よく 考えて みましょう。」  
みんなは、先生の お話で、また、新しい 問題の いど  
ぐちが、でて きたように 思いました。

(二) 学級日記

三月十一日 水曜日 くもり

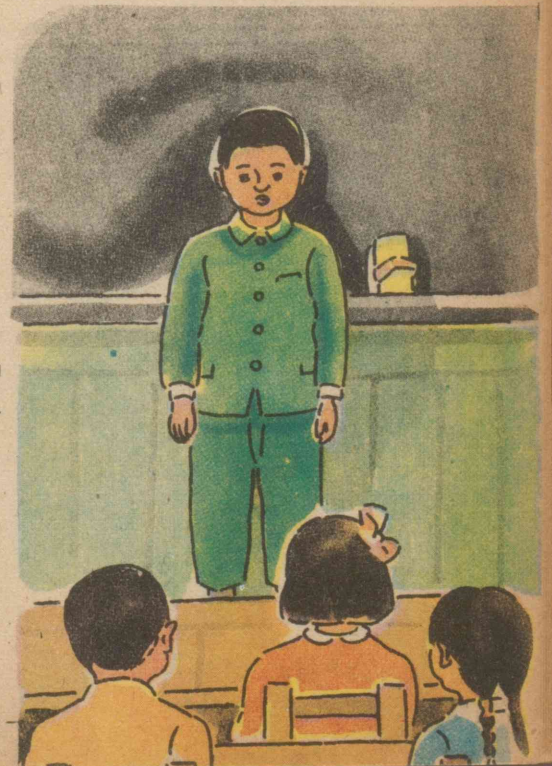
第一時間めに、新しく 学級に はいって きた 人が  
しょうかいされる。小川かずおくん である。

小川くんは、おかあさんと ふたりで、まんしゅうから  
ひきあげて きたのだそうだ。初め、おかあさんの こきよ  
うの 北海道に おちついたが、こんど こちらの おじさ  
んの 所に こして きたのだ。

先生に、勉強では 何が すきかと 問われると、

「ぼくは 音楽が すきです。」  
と、はつきりと した 声で  
答えた。

ひるの 時間に みんなが  
何か 歌って ほしいと い  
うと、小川くんは ちっとも はにかまないで、「春の小川」  
を 歌って くれた。みんなは、「小川くんが、『春の小川』を  
歌った。」と 言って 喜んだ。



三月十二日 木曜日 風  
けさから 風が 強く ふきだした。教室に ほこりが

はいつて きて、休み時間ごとに ぬれぞうきんで つくえ  
を ふいた。

この 風が ふき通ると、あたたかい 春が やつて く  
るのだと、先生が おっしゃった。  
きょうは 五人 休んだ。かぜを ひかないようにと、先  
生から 注意が あった。よく うがいを しようど みんな  
まで 話しあった。

三月十三日 金曜日 風 くもり  
だいぶ 風が よわく なつて きた。  
きょうから、「この一年間」について、めいめい、まとめ

たものを発表することにした。

「ぼくのしせい」という題でけんきちくんが作文を読んだ。まっすぐに歩くことをけいこしてから、だんだんしせいに注意するようになり、本を読むときも、字を書くときも、前よりしせいがよくなったように思う。おとうさんにほめられてうれしかったという作文である。

「ことばづかい」ということで、みどりさんが話をした。三年生になったころは、まだ、あかちゃんことばが残っていてわらわれたことも、あるが、今ではもう、そんなことばをつかわないでも話ができるように

なったこと、学校では、この土地のことばをつかわずに、ラジオでいうようなことばで、いえるようになったことなどの発表があった。

おしまいは、てつおくんが、「ぼくの読んだ本」について話をした。読んだ本を、ふるしきに入れて持ってきて、一さつごとに書いてあるだいたいのことや、思ったことなどをかかわる話をした。初めは絵物語やまん画を読んでいたこと、それから、かなで書いてあるみじかいお話を読んだこと、このごろでは少し長い文でもあきないで読めるようになったことなどを話した。

三月十四日 土曜日 晴

風が おさまって、空が 明るく なった。あたりが すっきり 春らしく なった。

きょうも、「この一年間」に ついての 発表が あった。

「社会科で しらべた こと」―まさおくん

「温度表に ついて」―さだおくん

「わたしの 作文」―よしこさん

の、三人の 話が あった。

よく 研究も して いるし、話も まとまって いると 思った。

先生が 小川くんに、

「きみは まとまった ことは 発表できないかも しれない」

いが、何か、この 一年間を ふりかえって みて、お話を

を して みませんか。」

と たずねた。

小川くんは 考えて いたが、

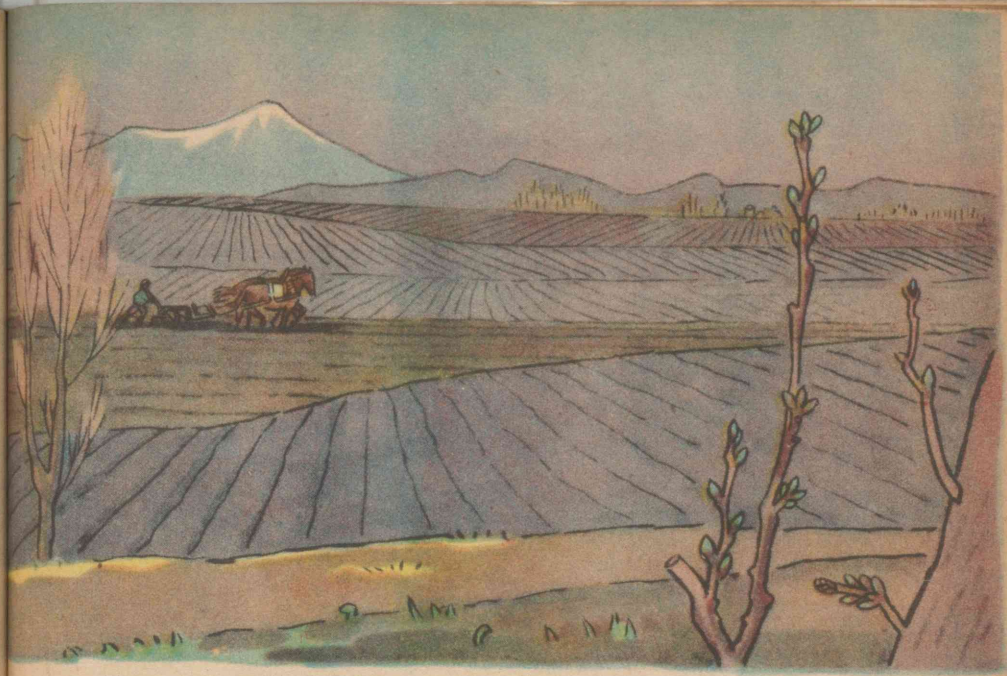
「うまく いえないんです。」

と いった。

「うまく いえなくても いいから。」

と いわれて、小川くんは まんしゆうを ひきあげてから、  
いろいろな 道を通って きた 話を した。





まんしゅうと、北海道は、きこう、  
くらし方、けしきなど、ずいぶん  
にて、いるように、思うと、いい、  
大きく、なったら、北海道に、いつ  
て、働きたいとも、いった。  
じぶんの、うちの、ことや、なく  
なった、おとうさんの、ことなどの  
話も、したが、小川くんは、ちつと  
も、顔を、くもらせなかつた。  
「ぼくは、さびしい、ときには、歌  
を、歌うのです。」

と、にこにこして、いった。  
ぼくたちは、小川くん、しんせつに、して、あげようと  
思った。

三月十六日 月曜日 晴

まもなく、四年生に、なるので、きょうの、自治会では、  
「学年の、終りに、ついて」の、話しあい、をした。

一、「この、一年間」の、発表は、おしまいまで、つづけて  
する、こと。

二、学校に、はいつてから、きょうまでの、ことも、思い、  
だして、みよう。

三、四年生に なる 心がけに ついて。

話しあいを して いる うちに、一年 一年と 大きく なって きた ことが わかる。

読む カや、書く カが、いつの間にか 進んで きて いる ことにも 気づく。

ふりかえって みる ことは、ほんとうに 楽しいと 思 った。

四年生に なったら、どんな 学習が 始まるだろうと 思うと、これも 楽しい。

みんな 元気に、なかよく たすけあつて、いつしよに 四年生に 進もうと 話しあつた。

学し ゆうの 仕方

みどりの 手旗 のりものや、いききなどに ついて 考えたり、しらべたり しながら 学し ゆうしよう。

三つの 文が、どんな つながりをも 持って いるか、書きぶりて、どんな ところが ちがうか、などを、考えなが ら 学しゆうしよう。

(一) 山の バス この バスは、どんな 役めをも っている バスでしよう。

この 文を 読んで、おもしろいと 思った ところを 話しあいましよう。

この 文を 読んで、感じた こと を 書いて、みましよう。

あなたも、のりものに ついて 作 文を 書きましよう。

(二) みどりの 手旗

ふたつの 文は、それぞれ、どんな ありさまを 歌った ものでしよう。

だいを、みどりの 手旗」と した わけを、考えて、みましよう。

しんごうの ことを、しらべたり、 話しあつたり しましよう。

気をつけて、書いて あると 思う ところは、どこでしよう。

(三) あなたも、みじかい 文を 書いて みましよう。

この 文を 読んで、お話が でき るように しましよう。

この 文を 読んで、その 話の すすめかたを 考えて、みましよう。

紙しばいに なおして、みましよう。

この 少女は、どう なった こと でしょう。お話を、して、みましよう。

この 文の、中で、アメリカと、日 本の、ちがって、いる ところを、考 えて、みましよう。

えい画会 三つの 文が、どんな つながりをも 持って いるか、書きぶりて、どんな ところが ちがうか、考えながら 学し ゆうしましよう。

それが、文化えい画、物語のえい画、 まん画のえい画で、あるか、考えてみま しよう。また、その、外に、どんな、え い画が、あるでしよう。

えい画と ラジオの おもな、ちがい

を、くらべて みましよう。

(一) えい画の ことを しらべたり、考えたりしながら、学しゅうしまししよう。たまごが 立つ

まどめて いって みると、どんなことを うつした えい画でししよう。この えい画で、おもしろいと思

た ところは どこですか。こういふ えい画は、どういふところに ねうちがあるのでしょうか。この 文を、シナリオに 書きなおして みましよう。

(二) あなたの 見た 文化えい画について、お話を しまししよう。つ

四人の いったことを、どれを はじめに、どれを あとに いったらよいか、考えて みましよう。

四人の 話を ひとまどめに、あなたも さだおさんのように、お話ができるように しまししよう。

前の「たまごが 立つ」話と、コロンプスが たまごを 立てた 話をくらべて、考えたことを 話あいまししよう。

コロンプスのように、海の こうつうを きりひらいて きた お話を

手旗」三さつの 本を 持って きて 話あいまししよう。

もくろくを 開いて、書いて あることがらを 思いだして みましよう。

さしえを 見て、書いて あることがらを 思いだして みましよう。

あなたも、一ばん おもしろかった文を きめて みましよう。なぜ おもしろかったか、その わけも 話あいつて みましよう。

むずかしかった 文、やさしかった文も さがして みましよう。

みんなて おもしろかった 文を どうひょうして、数を 数えて みましよう。

「おもしろい」と いふ わけについて、もつと くわしく 考えて みましよう。

(二) 学級日記 これまで、ふつうの 日記・さいばい日記など ありましたが、それらと、どんなところが ちがうか 考えて みましよう。

毎日 毎日の、おもな ことを 書きだして みましよう。

春の 近づいて きた ようすが、どんな ところで わかるでししよう。

読んで みましよう。

(三) 森の なかま まどめて いうと、どんな お話を書かれて あるでししよう。

えい画の できるまでの じゆんじよを、書きだして みましよう。

えい画を 作るのには、どんな 役目の 人が いるでししよう。それにあたるには どんな 人が いいのでししよう。

世の 中の「分業」といふことと、くらべて 考えて みましよう。

「力を あわせる」ことの たいせつな ことについて、話あいまししよう。

この 文を、シナリオに なおしたり、紙しばいに したりして みましよう。

力を あわせて あなたの 学級の ようすと、くらべながら 読みましよう。

ふたつの 文の つなかりに ついて、考えて みましよう。

三年生の 国語学しゅうの、そうまどめの しごとを、考えながら 学しゅうしまししよう。

(一) おもしろかった 文 「たんぼぼ」・「まきば」・「みどりの

「この 一年間」に ついて、あなたも しごとを まどめて みましよう。

小川くんの お話から、どんな ことを 感じましたか。

「力を あわせる」と いふ ことについて、いろいろ 話あいつて みましよう。

自治会や、話あいを した ことを まどめて みましよう。

ことばや、どうさを 反省して 国語の 力が どんなに すすんで きたか、考えて みましよう。

① もし できたら、この 一年間に 出た 新しい ことばを 集めて、いろいろ ならべて みたり、わけて みたり する しごとを しまししよう。

② ことばや 文の くみだてについて、も、考えて みましよう。

あなたは 四年生に なったら、どんなに して 国語の 学しゅうをしたいと 思いますか。あなたは、四年生に なったら、どんな 本を 読みたいと 思いますか。

新しいことば

ページ

4 手旗 スキー 温せん  
 5 おめでどう ていりゆう所 数人  
 6 車しよう 交通 不便  
 7 発車 運てん手  
 カバン 配達 くろろ  
 年がじよう  
 ゆくて うらて  
 かやぶき ゆるめ(る) おとしだま  
 あこひも 駅員 貨車  
 貨物列車  
 機関車 かけ絵  
 アメリカ (大)平野 どうもろこし  
 農家  
 ジーゼル 流線型 とくべつ急行列車  
 オレンジ色 機関士  
 信号所 こしよう

15 むね  
 16 組合 地図 マイル  
 17 駅長 自動車 貧しい 両親  
 18 医者 手あて 一流  
 19 委員会 大学病院 電話 会社  
 20 きふ金 代表 入院  
 21 たんか しが 台車 ブレーキ  
 いたわ(られ)  
 23 えい画会 文化 中国  
 24 立春 見たし 電ぼう  
 25 説明 スクリーン  
 ビアノ 事務所 つらら  
 実けん室

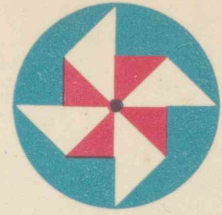
26 つみ(あける) 湯 なべ  
 ゆげ  
 ストップウォッチ 秒 つりあい  
 全体  
 まと(る)  
 28 陸地 女王 不安  
 29 船員  
 大陸 きっかけ はく手  
 30 学者  
 たんけん 成功 ねた(んで)  
 31 食たく  
 32 33 34 35 36 37 38  
 とら さつえいぎし きよう  
 すばらしい きつね ちえ  
 まかせる かんどく まね  
 39 38 コーラス セット せりふ  
 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26  
 39 めいめい きびし(すぎる)  
 41 ファイルム げんどう あんない  
 43 小人 ばら  
 44 反省会 ひる  
 45 かかる くらべ(て) 発表  
 46 もくろく  
 47 かつてな  
 48 見方 たとえ(ば)  
 49 問題 いとぐち  
 50 学級日記 ひきあげ(て) こきよう  
 51 はにかむ  
 52 (ぬれ)ぞうきん かぜ(をひく) うがい  
 53 かわるがわる だいたい あき(ない)  
 54 社会科  
 55 気こう  
 56 自治会  
 57 心かけ  
 58 学年

答 (52)	加 (33)	指 (26)	連 (20)	転 (15)	列 (10)	旗 (4)
問 (54)	念 (35)	秒 (27)	代 (20)	働 (16)	機 (11)	温 (4)
題 (54)	写 (35)	全 (27)	形 (20)	囚 (16)	関 (11)	席 (5)
級 (55)	演 (37)	体 (27)	等 (21)	父 (17)	鉄 (12)	客 (5)
科 (60)	曲 (39)	陸 (29)	止 (21)	貧 (17)	農 (12)	交 (6)
治 (63)	反 (44)	王 (29)	画 (23)	医 (18)	線 (13)	便 (6)
習 (64)	省 (44)	回 (31)	化 (23)	院 (18)	型 (13)	発 (6)
	課 (45)	成 (32)	説 (24)	法 (18)	行 (13)	達 (7)
	選 (47)	功 (32)	示 (25)	委 (19)	士 (13)	速 (9)
	賛 (50)	悪 (32)	度 (25)	社 (19)	信 (14)	貨 (10)

本書の中、既成の作品から引用し、又は新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

森のなかま	石森延男
さし絵	
関合正明	高橋庸男
浜野正義	榎原健三
河野鷹思	そうてい

新国語 三年 下		昭和二十五年
小国 319	みどりの手旗	月 日
APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION (DATE 1950)		印刷
著者	垣内松三	定価
発行者	八木橋雄次郎	円
印刷者	光村図書出版株式会社	
代表者	大江恒吉	
代表者	光村利之	
発行所	光村図書出版株式会社	
東京都品川区東大崎一丁目五三二番地		



3

下

なま光

広島大学図書

0130449804



光村図書出版株式会社